農経しんぽう　2022年8月29日号

タンザニア視察から

続・アフリカの農業機械化

②

KATCを訪ねて

日本が支援し、農機技術を学ぶ

タンザニア視察の2回目は、日本の支援によって設立され、キリマンジャロ州政府を経てタンザニア政府へ移管された「キリマンジャロ農業研修センター」（KATC）についてである。

一行は2日目、これも日本の支援によって造成されたローアモシ湛水地区を視察した後、研修センターへと向かった。同センターは現在、改修作業中で、講師の執務室やアフィカットの事務スペース等は、新たに建てられた研修生や農家用の宿泊施設に一時移設している。研修センターは、日本でいうなら農業大学校のようなもので、タンザニア全国に14ある研修所の1つである。当日は農機を専門とするシャウリタンガ校長が会見し、歓迎してくれた。

同センターは1981年に、日本政府の支援により設立された。キリマンジャロ州政府が所管し、農家の研修を行ってきた。その後、1994年、ローアモシ湛水地区の成果を全国に普及するために同センターを州政府からタンザニア政府の所管とした。研修生は寮生活をしており、その寮も日本政府が支援して建設した。

農業機械に関しては、①農機具類の改良試作②農機（耕うん機、トラクタ）の操作とメンテナンスを学ぶ。サーティフィケート（1年制の修了証書）と、ディプロマ（2年制の準学士）の農業全般を研修するコースが用意されていて、毎年、約50名が卒業している。

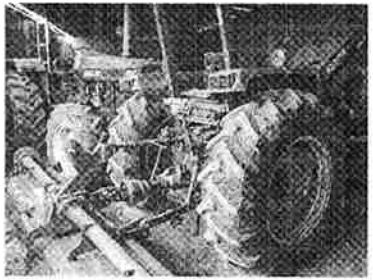
シャウリタンガ校長は、この研修センターがキリマンジャロ地区の稲作生産力・技術力向上に大きく貢献してきていると述べ、研修できる人数・規模をさらに大きくしていきたいとした。

また、卒業生の進路は、①政府機関などへの就職（農業普及員）②関連民間企業への就職③自ら農業を始める―の3つが主なものであるとしつつ、自ら農業を始めるには資金が必要で、それが借りられたりして用意できる者は可能となるとし、「若い人達にもっと学んでもらい、タンザニアの、この地区の生産性を上げていってもらいたい。それにはこのセンターがさらに優れたところとなり、質の高いトレーニングを提供していかなくてはならない」と語った。

また、同センターを中心に行われているアフリカの農業機械化を進めるアフィカット事業に関しては「農家は機械の有用性を知っている。アフィカットによって提供される機械は小型で安価であることが期待される」として、アフィカット事業への期待を示した。

研修施設には機械の保管庫や研修のための圃場、トラクタの走行練習のためのコースなどもある。ここで、最新とはいわないまでも農業機械の知識・技能を身につけた若者が地元の農業のリーダーとなってタンザニア農業を牽引している。校長の言葉からは、その自負が感じられた。

（つづく・遠藤記者）



保管庫内の農機㊤、研修生や農家用の宿泊施設と研修圃場㊦

シャウリタンガ校長